



源三位賴政家集

下

特別
~4
8142
2



^4
8/42
2



源三位頼政家集下

意

思ふとていそふれと衣をうらみよれぬるれ

同 寺林苑舎

萌生する三葉のち悲ふれ青龍のこよとまの露は

悲悲

空をけり人をわろし人忘れけ打をきうくねれ氣を

力乃らさと歎く小津きて悲とて悲の悲とてふてこあ人

人志まひくふふ乃目小んてんはや我意のあつれかや
皇后宮行亮頼浦御食寸合

ふとまけきり乃帝後我御悲とてまけり人むらわれ

あふと老をうけし事かしのふりあふめいまを
あまはとくかかるといふ事かみていふ人といふあれ
いしやうをよき思ひおめとていふ人といふあれ
後悔恋

散書恋

恋 信和院舟沈金

せきろわつ月れ川乃早き瀬なきよりおれさうみえ
遊夜増恋

恋初てさうさふいふこといふこといふこといふこと

恋書とて

世と歎よめと恨てとあく後恋ありあはれさうさうり
思ひ侘者よきあやがふいふこといふこといふこと

隔川恋

山城乃豆那れ里は妹とて兼友渡の舟よき人
旅よていふ人といふこといふこといふこと
よ海まうよきあやがふいふこと

あらばふ渡の川舟よきあやがふいふこといふこと
恨てあはれとさうさふいふこといふこと
あはれとさうさふいふこと

あはれとさうさふいふこといふこといふこと

みかしのあともふかきよるけりれと
いれとあいらいよ

水菜の光とまきつりと書つあつと見えぬわつめりきり

きこもとて我もまられしつらふらりて母ふらんとか
心よりかよおぼろけりて女はのけりて

思ふにやあつらふおぼろけりて女はのけりて
うれよ女はのけりて女はのけりて

てりてふふ表とてなまらけりて
あつらふあつらふあつらふ

せらふとて思ひふらりて山里又はなれりて

うた

あひやあつらふと見えぬけりて
あつらふと見えぬけりて

あつらふと見えぬけりて
あつらふと見えぬけりて

あつらふと見えぬけりて
あつらふと見えぬけりて

あつらふと見えぬけりて
あつらふと見えぬけりて

あつらふと見えぬけりて
あつらふと見えぬけりて

あひまてとゆきんあぢの池水とるはう後よりとて

い言と契はつたれはとていふ事までとていふ

まゆつて次の目人といふうしてとあつたを

かなら事れはつてあり今書さうあつては

てとあれはつていふ事とていふうしてと

ちあつていふ 小竹坂

後わつた山川の浅き形とていふとていふうして

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あひまてとゆきんあぢの池水とるはう後よりとていふ事までとていふまゆつて次の目人といふうしてとあつたをかなら事れはつてあり今書さうあつてはてとあれはつていふ事とていふうしてとちあつていふ 小竹坂 後わつた山川の浅き形とていふとていふうしてあつていふ 清和院無言堂 遇不告恋

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

あつていふ 清和院無言堂

あつていふ 遇不告恋

返途車窓

れきてゆく我をさへくも人垂て移くともゆきむが車うか
不語終隠悲

改名隠悲

引きてゆくもあてあふれ我と妹と今もあひん
西事とててゆき悲の心とくくもゆき

悲の心代 梅窓と云

いとくあふと恨むるやあ ^{きい} ^{やい}
いとくあふと恨むるやあ ^{きい} ^{やい}

尊勝寺にて人の恋介とみゆき

我悲とてやあはらと思ふと起てと傳 妹もあは
何人色あき悲はあはらとてあはらとて恨
あはらとてあはらとてあはらとてあはらとて

見家思出恋 言林苑舎

古とてあはらとてあはらとてあはらとてあはらとて
人あはらとてあはらとてあはらとてあはらとて
あはらとてあはらとてあはらとてあはらとて
あはらとてあはらとてあはらとてあはらとて

かゝり

あふふこゆ心乃をりけり世はやくあつて我身とこれ
過門不入恋 寺林菟舎

人かかれば明ぬまの戸をささるれ物とささる
隔河恋 尾坂あ合

とらりこあ妹う柄と物さほあか海川乃らさる也きり
待不來恋

位吉乃ま川とさされと沖津浪立ゆらじとらああふ
行路恋とらば事伝

折こり野上の里乃妹とててりくろい渡ちりきわ
な事と命にうあふ事とらかりぬ恋とらわはとふ

今ちあふ乃我恨けり物とあてこふとや妹ゆらじ
恋ちる人後ちるうかぶ玉事とらやんらとてささる
世中とあけぬ程の乃かりとは何よまて妹と恋じ

秋林菟 恋十首内

あ妙乃枕ちさるのうぬ事とらさるれをさるれ縁
おのり

人ちささるああ床よこあつあつ心と我とゆつあ
せ兼とほとささるしてあつあつ我うこつあつあつ
奥山乃枕のささるり我られやあなゆい乃とこらり
今ちあふとらとれこもれあもとあああはあつあつ
はまことあま人はとらとら我世のつあつあつと

落切らぬ洞やとけふ恋はけり物にうつらうつら
言出後悔恋

山道はふかかくてもある一歩一歩と歩むはたりに
云切はつ恋

おとの葉とまうひかちちる洞か思ひ物さへあはれたる
依月増恋 右大臣家會

妹ふとゆきうららき物ほれ枕乃らうふをう月夜
時に見恋

奈古乃海塩干となくつ磯の石とあはる君さへくくはら
円意我恋

みこもわれ神も妹もわらんふと雲より我のうらさ

秘知音恋

うきうきぬ人よあはれきく恋といふとあつたはいていふあはれ
秘後者恋 法住寺教會

らうきくとせめても思ふ玉章の恋はこゝろ我をりては
返書恋

玉れよ我ひくまはれあうひせみきりもたてとあへたはは
時逢恋

鴨ねのる志根の池乃清氷じりくされぬあはれまきま
奇鳥恋

妹とわらわりのこの孫れもあはれをぬ歌よもてま
あつた恋の女房とせしてしるふはうららきよ

曉よりりて浦へてきりりし
 おとどけき大なる御物にてはなれもあつめ家業目
 二条邸のくくの清時同用増進とりのかんと
 小うりりし

うき人れ上とえとて実果ぬ又やこひはなれもあつめ
 大貳里家つ手合よ進乃公とくみゆあり

くまを井乃渡よりまうと志衣之とれ種を根なりき
 失内事忠

いけこそや妹をよはさかろし進てきりぬねおむねわね
 思移媒忠

はなれあつめとのかつひとをね我思ふ公とせうしき

平片思忠

う乃公乃よりりし我と君何し思ふとつひとて
 忠

無名さふあんと思ふ世中乃人のいひりせあきうき
 独糸の床いさゆきと妹とむじうあつれ凡へつとを思
 されよふか我乃乃うさふ進てより思ひよめと人つと
 進とるんぬさふせめてまうけりはつととん上れんが
 伊邊女談

くさあも色ぬがとつれ夫と中は進て輝のまうつ妹みぬ
 語和不會忠

さき事いれもくまれ切えねんこれ葉のよと何よつとん

うゝ後六思ふて後よふ恋乃んぞんくふみ
侍

かひいおれ新子花とよひみおれもあつたひん物と

恋やうはなひりくへり

恋とれとけかひいそんそんたよあ海よあわらん

舟の恋

うゝうゝ泊とてそけ舟ゆふくぬい渡ちりけま

寄山恋

思ひも今うら海のあひまゆくのゆり船とるわろ恋か

うゝあゝくゆり女と東まひりう恨何してゆり

て侍もつよふふまごりけりけりちるきむひ乃

此まてあつてまはりてあつて侍とるんとして

其のいふ中もあつて又あつて花田とあつてあつて

十月はにまひり此大内よまひりあつてあつてあつて

女とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

ととるは神ととあそりきれん
女よりりて清よけけく
も孫けととあそりきれん
時く物ア女はうてまり
今思ひ縁前んとして
いと女とをうと思つ
はよさうさうさうさ
おまよけりさうりて
礼みてアはうりけ
はちやんさうらん
乃丹あふと云んと

未末とあそりきれん
多えて久く成よけり
はちやんさうらん
よふおれと人た
あやめよその孫よ
絶て久くあそり
はちやんさうらん
うけあふとみ
小作長

まうのわがしるすをききしはてしなく静かきそな中此の心

行路恋

とめて我をよもかたるもむらう一面新しき事とていふなり
歎倦きよこゝとして新しき事とていふも新しき人かたはら
たして久しき女より男よりいふのみはくさ
あり女よかえりし

意

人志事あ本葉う下れ水あま我神くれあははる涙き
思ひつゝあまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
麻衣うれあまの心あまの心あまの心あまの心あまの心

人志事あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心

湯まの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心

渡川あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心
あまの心あまの心あまの心あまの心あまの心

侍人...
冊
五

身...
〜

おし...
おの...
ら...
な...
悲

左京大夫...
旅恋

妹...
〜

同 右大臣家會

思...
七月十日...
身...
〜

七...
久...
た...
君...
〜

小侍...
〜

さて後で後うはうひのう菊ふ付てあまうり
はううーあり

ひをぬと様とてあまうりー菊れおじ方めく梅ひよるり
也ー

うはうりう菊うりうと根へ我をうりかーあまれん
後朝恋

あまあまうりうと思ひー恋ひあまうりもあまうり
恋

目次(所)恋ひあまうり海にわらわ恋うりあまうり
見書増恋

あまうりう海にわらわ我神やわらわれうりううり

返書恋

約くて何ちらとんおれとあまうりーあまうり
隠傍女恋 此後寺あまうり

あまうりあまうりあまうりあまうりあまうり
遠所恋人恋 日

津奥のうれとん恋てあまうりー妹あまうりあまうり
観身不言恋

あまうりあまうりあまうりあまうりあまうり
あまうりあまうりあまうりあまうりあまうり
あまうりあまうりあまうりあまうりあまうり

何ううれあまうりあまうりあまうりあまうり

悲乃心を人へ傳ゆ

此の世に人へ傳ゆと云ふは、
冬これん物より後、夜宵の海に舞臺と云ふ事あり、
今この世もこれん事あり、
妹をいひこつて、
お初りはおむ深衣神と云ふ事あり、
下女はあふと云ふ事あり、
我をちよめんと云ふ事あり、
寄草悲乃心伝

るよと云ふ事あり、
わいこつて、
お初りはおむ深衣神と云ふ事あり、
下女はあふと云ふ事あり、
我をちよめんと云ふ事あり、
寄草悲乃心伝

と云ふ事あり、
お初りはおむ深衣神と云ふ事あり、
下女はあふと云ふ事あり、
我をちよめんと云ふ事あり、
寄草悲乃心伝

今こそ脱と云ふ事あり、
二月廿日、
お初りはおむ深衣神と云ふ事あり、
下女はあふと云ふ事あり、
我をちよめんと云ふ事あり、
寄草悲乃心伝

戸あり〜後きもぢなり〜ひさしれよりいひ
けり〜あり

海よりきりし井りてはるるをわがももも〜

あな〜
小の辰

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけり

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけり

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜
かろ〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけり

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

あなをけりてはるるをわがももも〜

うら

もつれ花を海乃船よりもつれむらさきをゆきしを
りる女一始てあひて物こし小舟をひくくか
あひしてゆきし物こしはうら

あひしてゆきし物こしはうら
むらさきをゆきし物こしはうら
むらさきをゆきし物こしはうら

と物こしはうらむらさきをゆきし物こしはうら
思ひとまらぬかどし車かゆきし物こしはうら
ひとあそびをせまきりくくか
南無乃むゆきし物こしはうら

とつれ花を海乃船よりもつれむらさきをゆきしを
ゆきし物こしはうら

今う知れ花を海乃船よりもつれむらさきをゆきしを
ゆきし物こしはうら

越ねともえをえくぬ舎は海乃船よりもつれむらさきを
ゆきし物こしはうら

いとあはれむらさきをゆきし物こしはうら
ゆきし物こしはうら

ゆきし物こしはうら
ゆきし物こしはうら

ゆきし物こしはうら
ゆきし物こしはうら

物やう免て後二つ言作ゆるり〜と小侍
返りてらひひけり〜

か〜と申中よ〜と申せしむれは
未〜

い〜と云はれぬ乳〜をれよ我もはひけり
久〜と云はれり〜女れも〜と云ひけり

〜と云ひけり
〜と云ひけり

草にまきけり文字のたの我あり今申せり
疑行未決 言林苑云

未やそれと葉かひしてまわれ我を〜と云ひけり
未乃ま〜と云ひけり

命を〜と云ひけりと思はれぬと云ひけり
不設被惡也

〜と云ひけり
欲盜悪

お床を〜と云ひけり
曉よ人〜と云ひけり

〜と云ひけり
〜と云ひけり

思ふれぬるおれ〜と云ひけり

夜遊と云ふ事と 按察十首内

おもさう枕とほさう涙ふ咽ふれはや神よあつらん
くさくさいけきう女へううきやゆらうさうはは後
果わもこいもいもあきさ新枕とゆんさうり
とまて今言伝さうらうかれらうはうらうらう
悲ひううたれか弁れさめらうらうやほあわくはひん
ぬ

紅志はくさほゆさむいさたれま根まうつら心とそ夢
一會之後不會悲 秋林苑會

うらうたのてと恋うまうらうと恋うあひれうらう
悲 経心初た家子合

ゆもふ八恋のやまいと何とけそれゆもふらうらうらう
あとりえぬ渡の川乃後さ際と妹うあみかろけあうわう
いあひみさう原う芥津さうしんもわくそ神あまきま
色随不會悲 法蓮寺初ま
神ひまはさひうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
被と恋人悲

君と思ふ人の公のうらうらうらうらうらうらうらうらう
恋自我下人

我をとうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
恋 若按三位子合

急志形ん後八始とれわうらうは涙とらうらうらうらう
急志形ん後八始とれわうらうは涙とらうらうらうらう

下 三十一

終てえ〜ぬぶ女〜
まにまりとあつて後らして市中の流るれん
りてあか〜
とじ〜もあつてあ〜

人〜れ〜

橋上待人

妹といふ本芳橋の橋よ初も〜

東西人

い〜

老後恋

事〜
年〜
と〜

老乃〜

あ〜

年〜

通〜

綱絲〜
あ〜

ぬきよけてはうらうら
まよふもよめぬらぬら
引せし
目ふうて糸をぬきぬき
遠夜境をぬきぬき
目深し
祈佛徳
人かきほめぬらぬら

雑

世中は思ひぬらぬら
いしころあふ糸をぬきぬき
てゆい内糸人はぬきぬき
とぬきぬき
君うぬらぬら
ぬきぬき
思ひぬきぬき
うぬらぬら
女房よみぬらぬら

おとれと仰し楊梅今よりおれ上にておしむる
二代乃清門は昇殿して仰し時三位大進清
輔朝臣れりともりしつらうしつらう

也

立河の二雲井乃あつと流てん独次よ唱とほきかん
諸共よちと井とつらうつらう我とほてとらしつらう
蓮華と流院の執行静賢あつとつらう

つらうつらう

也

本流よとりあしつらうつらうつらうつらうつらう
本とれと何歎きんつらうつらうつらうつらうつらう

右少年 親宗たるは流つらうつらうつらう
あ月乃出つらうつらうつらうつらうつらう

也

もねよ出つらうつらうつらうつらうつらう
正下乃加階して仰し時右馬権次陸信つらう

也

あつとつらうつらうつらうつらうつらう
か階は後ほとつらうつらうつらうつらう
か納ては見降つらうつらうつらうつらう

也

つらう

位山打りつよの孫てあつらひにせられし事てゆへん物と
かゝる

藤さしとてつらつ位山を總がとよひてぬん
月ころこの河中央に大盤前よりとて

くわひきくぬととらげふてをりしれりぬぬ
あ

のほりし位山も重れ上も幸れさるゝあつらひとて
敷上のつと女房大補よりとらけつとて

とすまきく神あもる娘とてはみおき天乃と衣
え

紋とはあつらふれりつとては心神の縁に

母とあつらひてつらつとてつらつとてつらつと
三位大進信輔の自りつらつ

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
返

あつらひてつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
昇殿の時つらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
つらつとつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと

祝言乃井ていさむらひしれりて
として御事より御事なり

本説てん... 皇太后の御事なり

あく礼てん... 皇太后の御事なり

幸の内よ五位れ上下... 中宮亮重家

あけ衣を... 皇太后の御事なり

あう下... 皇太后の御事なり

いさむらひ

あう下... 皇太后の御事なり

あう下... 皇太后の御事なり

あう下... 皇太后の御事なり

あう下... 皇太后の御事なり

あう下... 皇太后の御事なり

女院百目乃清藏法師のそひ倍れ布教よわ
くのわくそくぞとてまのこらひすいんさ
うくとらうとて人々具此くしてつらぬ中
中宮権大進皇家のしうう一あつたひ跡お
んくつゆ一ふけんくたつてあつてしう
音羽河と死つるおと水がさふ人の心にくるおと
也一
なまの川はよむいんくわと園のまう水まをさかん
ふまは伴波う敷あつ中納言山店は瀬た
しゆれ岩ようとてしんくつりけあつてあつ
おのて後つりあつたわ

くくかてあひく女よ正月朝々乃日子日
おははくくく
今日より公若と孫の目れおを思ふ御よ人を引ら
別當入道大若よたんとて中納言の比
ゆりくくくおはあのお笑うりてお
あつてはゆりて後ほくく
おははくくあつた花ゆくおあつてお
也一
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
後下らる事と歎ゆるはあ
思ひまを重なる様とつらうあつてあつてあつて

ひらねかあり月の入り世はあつたかきあつてや
寶莊嚴院よあてねわ梅河りとやうく物
の静賢よあね枝とこひよはらうとあつた
かきいえは〜明きあつたとしたるあつた
よとあつた

ねじととよん年れ春まで梅のあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
年れあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

播るを乃嘆きてりてけつよ老あつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

引はきておのふれりたるものも三熊野の位をいしとて
熊野よはくくゆきまらる人なりけまはあつた海
礼多のしや

少輔別當公宣仁とていふもれゆるとてい
る用とてりゆらわらてあつてあつていよしてき
及ていふかと思ひけり程よ平林荒まて人丸
新借一ゆきる目あひてくすよみらとていふ
狂魚といひはうりけぬ

幸ふれとていふもつていふてみさか我を死を後といふ
也
悪くてみさか我を死を後といふとあるもいふ

上達ア教上人あまると大内れむとれゆりに
三位大進法輔みとていふはうりけぬ
也

初々なる初一昔乃百あやむれりよりいみるを考つて
也
初よあん昔とておの神の上いあつむむとやあつてつる
岡崎乃三位やういよあつてひて出家のうり
空てとていひはくといふとてつる
三年よとて君よとていふ身も真乃道よとていふ

よとていひはく乃歩進をいふとていふ
也
乃イ
乃イ
乃イ

同入るまゝりともふり筆をばさへひとてしづく紙
よ書はあてゆるき

やぶ方は筆小湊うとわれあふ我りくふをわすれぬあ
あ

あつるは洞はあつふ水董と我目の前よまきてくれ
あふ女のしとく山の塔よ月つんとひる程わき
あふ麻をばつるすすそとく

山乃とにふんとひる月影を我よまきて衣をもみよ
あ

ふ世まてと君よと我てたつ月と山がまて今をとりかん
別當入道山田よおんひるあふ君海よりとり

よむれ事ともかたわりのけいけんもつ兼
とくゆて後くれなり有流乃小面れ車をもれ
面影小くそあらしとて

有世れ君やうとひとあつ流んをんまに昔あけ
あ

せもろりの女もあふあまあれ我も昔のくまをれに
女浦入道素賞年あつ乃妻よとてて歎く
とあててあつひつらとて

程をかよわしら乃書と持あつとんよ清かを衣をも
あ

末乃流りとの書下りあつとをほ世れ上とたつをあつ
あ

千代程も形く合をこゝ染ゆふあり
九月廿の夜まゝり乃程ふ天王ちまのりてゆゝに
伴契入道焉業つりともよりあまりてゆきつら
あくとやてはるゝ一さり

系一

白河の君海けき共よそ難波とてわ乃亂文をま
又女房大捕さうりりさりけあう未くとや
うゆいひはるゝ一あつ
底流とむよふ龜井の水すこて心乃あつとさ記してつ
け事と伴契入道ていひはるゝ一き

西乃海は後とあつ月の月れ舟あ舟をりを流れあつと
あつと龜井よまあとあつ月乃船あを系ゆりあ
又あれより合のりともはるゝ一あり

系一

諸夫よいさうゆらん核未れにむいさうあつと
え

舟は浪君とあて流る海れ舟出いさうん西の門より
其後合のりりねとやて曉よおひてはるゝ
一けりさうは舟よ系あはしてそとゆき
都つと我らうういさうの海れあつと岸へゆまあふ
あ

はるけくはりて我もあまの秋乃方いそぐれぬか
 おとちとりのあうぬい念佛ありて我もす
 ら奇とてしてきりしつゝあは経よみかよせ
 一紙停む入るあまけりうよ入てまの門やい
 借馬来らぬいふとて思ふこゝして思ひ
 ありのやと門むいよよみゆしつゝあを
 ひせりれけりもあはりて後入るなりと
 幸三首傳てはるしつゝあを

仍ちとくはとあてのころ極東にけりいそを思ひ出され
 思ひやま^{おや}秋^{あき}の月^{つき}きりれい乃はの群立のふはきそ思ひ出すか
 とみのあうるれふとらへ松風ときくあはりてあはれえとあう

西寺三首とこそいふ来て

翠乃言もきりしつゝあはれは思ひ我もとと人我うとあ
 あう人れり^{よまき}とらうのあまはつとほくえいとてしつゝあ
 一もあ

西寺とんふ人あはれとあまあはつとほくえいとてしつゝあ
 西一人あうりて 女房大輔

我もあうり乃浮世を哀るる春乃雛子れるわる海は
 和寺可よ人のあままりて夜もあうりしつゝあみ連
 歌をよしてあそくれゆしは隣りけり木さ
 かなあひくよえれけりきえんうりて人をあひくは
 ゆしつゝあひゆよあうるあまらるれ女房二人をい

物乃うらにいきであるくま教をもして今よ
つふあつくまあふせんるもPくくひてあ
もやうく明方よあふくはゆくりあつて
後二三日くくりあつて一人かりと遣りまう
君よあひてありにく昔も一巻よあふる物とあ

あー

我々の昔もくはあはしりあをね始てうおま
くまをあて今ひとりの女房さひくとりあ
まといひあひくとりてさふまよはきう
さひのまへしあつてあそとあそ
からあつてあをあまそあつてあつてあつてあ

あー

おまへらあはあまあひのあつてあつてあ
あひあつてあ女うああつてあつてあ
こあつてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ
とてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ
ああつてああつてああつてああつてあ

あ

まうしそ思ひあふくぬれをゆみわ乃板乃れ月の中を
 南登乃ゆゆしうとをう人よとせて後よりあつた
 急人よせんをちらまりてうしくをとりまじり
 まりしうを月れせらあまり乃ほとよひは
 けしあしを

ろん春乃雪井の花を待つまらぬゆまうしと
 ぬきをとまらぬの心ぬれしうにあらちあきんと
 景乃乃と位入をれしとに流乃くをたま
 るれ流の下より海もの水をとくしつあ
 きててこれとあきしあれ流るるあしにみ

えーびんてゆりゆりてけうしけぬ
 うゆふとあしあき流るるをゆてとてとれぬ

春乃門のあしあき流るるをゆてとてとれぬ
 けしあしあき流るるをゆてとてとれぬ
 うしあき流るるをゆてとてとれぬ

春乃門のあしあき流るるをゆてとてとれぬ
 けしあしあき流るるをゆてとてとれぬ
 うしあき流るるをゆてとてとれぬ
 如渡得船
 及岸とゆふとやううしあき流るるをゆてとてとれぬ

人丸新供の前して一糸経供甚人くせしき
作しり 勸持品の云と

今日とては終の佛と思^{せよ}ひて我と恨み不得
化城喻品

うれむいそくちきじつあるわれ終の真のたまひなり
わきし地方はありて平くうしひきろぬれり
より喜れはありけりおははらうし

朝戸のてまされやせまけふの雲は極れ書よ踏かてと

也

おはあつる程はゆるい雪れとよき人おのつるやうせ
いとらむはらうし

こつてははらうしてはきうあり

才とけめんいうはきん独祥てくるお神れぬるおおま

也

偽乃才とえはまはひおの独の祥とよひやうあん

甲斐の大進為基なりとより故紳大納言集と尋

はらうしありしおのしと大事なり本学あり

てんしおのしとせしはらうしけり

とらねと誰う君よあつはま昔の徳と尋きりとは

はらうしけり

はらうしけりかきまやとして昔の徳と尋かきりそ
高野院まらうしけりけり

花はけりて

みかるといふか 梢のむらけを自らさるのあや 次が

あ

あやのれりといふものむらけを自らさるのあや 次が

敷軒入る西宮とて言合 けりし海上眺

望乃をといふか

和の海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

あやのれりといふものむらけを自らさるのあや 次が

思つて神をけりていふは けりし海上眺

望乃をといふか

常よわらばいふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

年はけりていふは けりし海上眺

ねとていふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

らよとていふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

とていふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

とていふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

あ

とていふか 海とていふは 漕舟の舟の終るれせといふか

清和丁胤源家祖產得賴圓天下奇歌詠直登
三位任射聲耳親結九重知文經武緯并
於此義膽忠肝更有誰成敗論切同婦女
死生處義是男兒欲除巨毒身先殞長使英
雄泪更垂歲在治兼凶焰威宇河衣幾僵
尸時臻壽永旧冤復泉下欣々想展眉不
帝
皇恩酬戰沒兼修佛夏助冥次貝蓮華儼余
東濃地古栢依然蜀相祠石馬鉄衣生氣凜黃
鸚碧草后人悲四絃演史談陳跡三尺成童激
壯思有客謁予題畫像長吟贊卷還之

右

蓮華寺殿正三位源氏賴圓大禪定門
肖儀置_レ于_二密嚴院常任_一

永享三年三月廿有四日

前南禪比丘惟肖得嚴昏

右二帖為_二濃州山縣郡蓮華寺常住奉_レ奉_レ
當任青陽軒昌慶書記者也

延德三年八月五日

法眼紹永

住山叟昌桂寄進焉

不許門外他借受用之旨衆評如件

明應第二癸也林鐘吉日

傳衣院 敬教判

兼隆寺 敬達判

蓮華寺住山 昌桂判

公卿補任云

從三位源賴政 治承二年十二月廿四日叙從三位

故兵庫頭從五位上仲正一男 母

辛々白河院判官代保延二年四月十七日補藏人

同六月十三日從五位下女御道子御給仁平三年二月二

日被聽ニカ養福門院昇殿ヲ久壽二年十月廿二日兵

庫頭保元三年二月二日聽院昇殿御即位日未給

同四年正月廿八日從五位上去年即位正月冬河介

仁安元年十月廿一日罷所帶職兵庫頭叙正五位

下同十二月卅日聽內昇殿時兵庫寮功又聽內昇殿

仁安二年正月卅日從四位下給之內院還昇同三年

下

四二

十一月廿日從四位上大嘗會院院給嘉應二年正月十四日右
 京大夫兼安元年十月廿六日正四位下院給安元
 二年二月五日罷所帶職以男仲綱申叙正五位下
 治承二年十二月廿四日從三位同三年十一月廿八
 日出家同四年五月廿六日亮同謀反之堂類被
 梟首訖又

▲清和天皇 貞純親王 經基 六孫王

滿仲 多田新叡意 賴光 正位下攝津守 賴綱 多田三河守

仲正 兵庫頭 賴政 右京大夫內侍護 仲綱 伊豆守
 賴行 女 二条院讚岐
 女 且秋門院丹後

F
 〇四二八

元曆元年七月十二日以後丞相自筆
各寫畢後九日始而同十二日終切時服
菜日也

右近衛權少將藤原左判

于時元龜二年三月十八日書初元六日
訖隆興定城郡飯野平重隆入道
明徹取持本寫龜云

寬文元辛巳年臘月吉祥日

林和泉掾板行



